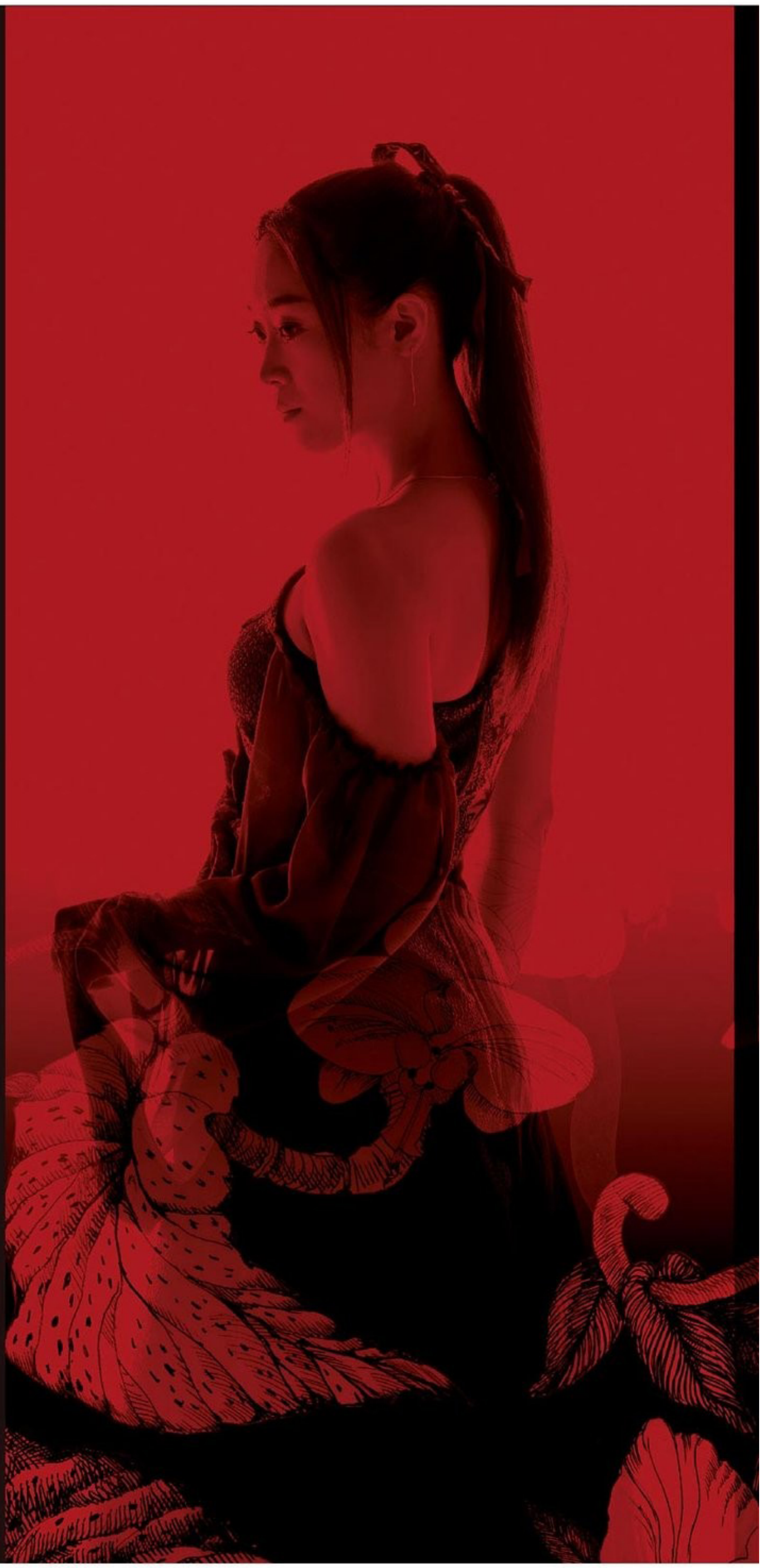


百火撩乱

4月からの全国ツアー『Kalafina “9+ONE”』を
終えたばかりのKalafinaから
21枚目のシングル「百火撩乱」が届いた。
勇ましさや凛々しさの中に感じる、
かすかだけれど確かな希望、
そして儚さ——単一色ではない、
様々な心の機微を感じさせるハーモニーと
詞世界、深みのあるサウンドに
どっぷりと浸れるナンバーに仕上がっている。
TVアニメ『活撃 刀剣乱舞』の
エンディングテーマでもある本作に込めた想い、
歌声での表現についてじっくり語ってもらった。

Text ⇒ 大西智之



Kalafina

■ニュー・シングル「百火撩乱」が完成しました。表題曲はTVアニメ『活撃 刀剣乱舞』のエンディングテーマでもありますが、届いた時、どういう楽曲だと感じましたか?

Keiko「アニメ作品のシーンを想像させたり、ファンタジックで、色合いや質感が先行して見えてくる楽曲なんですよ」

■『刀剣乱舞』、もとはゲームですね。

Wakana「そこからミュージカルや舞台にもなっていますよね。そういう作品に携われるんだな、っていうドキドキはありました。初めて聴いた時は本当に格好いいなって。特に、曲の最初の歌い出しにドキッとしましたね。楽器の方々のレコーディングを経て、ドラムのどっしり感だったり、胸に響く部分が変わったんですよ。そこで歌も変化しましたし、3人でレコーディングして、さらに格好良さが引き立ちました」

■テンポ的にはさほど速くないんですけど、リズムの力強さが印象的ですね。

Keiko「仮歌を歌った時と本番のレコーディングでバンドのサウンドが全然違ったんです。仮歌では、静かに始まっていくイメージで歌っていたんですけど、そんな優しい曲ではなかった(笑)。常にしっかり、凛とした声を残しておく。そういう勇ましさ、凛々しさがある曲になりました。イントロに入るフルートが〝和〟を感じるように、日本の筋が通った美しさ、というか。ジャケットワークもそうですよね。それを声でも出したくて、ひたすらブレずに凛々しくいたい、と思って歌いましたし、そういう曲だと思います」

> 常にしっかり、凛とした声を残しておく。
> そういう勇ましさ、凛々しさがある曲になりました。
> イントロに入るフルートが〝和〟を感じるように、
> 日本の筋が通った美しさ、というか。
> ジャケットワークもそうですよね。
> それを声でも出したくて、ひたすらブレずに
> 凛々しくいたい、と思って歌いました

■ウインドチャイムの音色から始まって、和を感じるフルート、壮大な弦のアンサンブル。そしてハープは美しくて。イントロからいろんな表情がありますね。

Keiko「イントロはどんどん派手になっていったんです(笑)。どこまでもいきたくなる世界観を持ったアニメーションですし、梶浦(由記:プロデューサー。Kalafinaの全曲の作詞、作曲も手がける)さんの中で変化していったんでしょうね。だから歌う時もつい感情的にしたくなるけど」

Hikaru「激しく歌いたくなるけど、それをしないのがこの曲ですね」

Keiko「そう。我慢、って感じ(笑)」

■感情を抑えているから、ギターリフやドラムの重いリズムに歌がからんだ時、力強さの中にまず凛とした空気が出るんですね。

Hikaru「歌は全編でレガートに歌っていて」

□縦のリズムを感じるサウンドに対して、歌は音符で切らずに、滑らかに繋がってます。

Hikaru「私はリズムをガシガシ歌う部分を担当することが多いですし、全編、流れに身を任せながら歌う歌い方は、この曲ならではだな、と感じているんです。そんな曲をいただいた時の感想ですが、もともとゲームの『刀剣乱舞』をプレイしてたこともあり思い入れが強くて。歌詞を読んで、意味を想像して泣きそうになるところが結構あったんですよ。でも歌う時は感情の起伏をグッと抑えて、強さと美しさがある曲にしたかったんです。ただ、途中のメロディが変わる箇所だけ違うんですけどね」

■〝花のように〟から始まるDメロですね。

Hikaru「あの部分は、梶浦さんからディレクションいただいて、ガシガシ歌っております(笑)。ここは〝男士〟ですね。〝刀剣男士〟の戦闘シーンのイメージです(笑)」

■歌詞ではどこに惹かれましたか?

Hikaru「始まりの〝夢を見て僕らは泣いた〟からもう深読みしたくなります!(微笑)熱いものと冷たいものが同居している感じが言葉の端々に見えるし、それが曲のいたるところから感じられたんです」

■思いを残したまま心が散っていく、という儚さ。いつか焔は天に届く、という希望や願い。いろんな感情が出てきますよね。

Hikaru「それが過去のことなのか、今のことなのか、という考察も出てくるんです」

■そうか、時間を超える物語だから。

Hikaru「そういう曲だから、自分ひとりの解釈——もちろん歌には、ひとつの解釈として込めたんですけど、聴いてくれた方が捕われないものにしたくて。余白を残しておく、ということを心がけました」

■Keikoさん、Wakanaさんが言葉で感じたことは?

Keiko「全体的に悲しくなるんですよね、滅びへと駆け抜ける、散っていく……。ただ、それを主人公は淡々と受け入れて歩んでいて。悲しみを前面に出しながらも確かに進んで、闘いに行こうといる。その生き様がものすごく儚くて格好いい、と」

Wakana「ホント、悲しい部分が多いですよね。だから私はあえて笑顔で、言葉をハッキリと柔らかく歌いたかったんです。後半に出てくる、〝思いを残したまま 心は散って行くけれど〟は特に、結果として深みが出たんですけど、悲しみではない方向をイメージたんです。〝終わるはずじゃなかったけれども〟というイメージでした。〝泣くはずでもなかったけれども涙が出る〟とか。歌詞の一つひとつに、そういう逆説的な感情を感じたからそれを表現するのが難しかったですし。だからこそMVでも歌う時に笑顔で想いを残してもいて。希望だけは残したいという気持ちで歌いました」

■最後の2行にある〝夢が今も空を焦がす〟のラインは希望が含まれるのかな、と。

Wakana「うん、〝天に届く〟と言ってますからね」

Keiko「その希望も絶対的なものではなくて、ギリギリかなと思う。でも男の子が主役だし、このギリギリな感じが男っぽくていいですよね」

Wakana「潔い感じがね」

■さらに歌について掘り下げてみたいんですが。Keikoさんのリードヴォーカルから入っていきますね。そこでのポイントは感情を抑えるところだったと。

Keiko「全体的に、熱い気持ちはあっても表に出さない色合いを感じたし、歌に、凛としたブレない筋があるどっしりとした声がいいな、と思ったんですね。それは、仮歌の時の印象で静かに始まるイメージで作っていったんですけど、楽器を録り終えたサウンドに当てた時に〝負けますね、梶浦さん〟というお話をして、想定していた以上に強くスタートさせた結果でもあるんです。こういうレガートな歌で力強い曲調って、ビートはきちんと刻まれているのに、そこに当てないというさじ加減が難しくて。感情の表現はアクセントより、常にしっかりとした凛とした声を残しておくっていう部分でして。それが勇ましさ、凛々しさになりました」

■歌い出しにあたる1番のAメロはどっしりしていますが、2番のAメロは表現が違って。

Keiko「実は2番のAメロって、梶浦さんが〝落ちサビ〟に入れるような内容を綴っているんです。2番のAメロで主人公の心情がリアルに描かれている。だから、感情的になってほしいというリクエストもあったんです。しかも、歌詞とミュージシャンの演奏の一個一個が構築されていて。それを感じたからオケを聴き込みました。オケはここで落ちるんだ、ここでシンバルが入るんだとか理解して、音に合わせて歌も梶浦さんと綿密に作っていきました。結果、1番のAメロは意志を伝えながらスタートを切っていくような歌唱法になったし、2番のAメロは内に秘めた想いを表現する歌になりました」

■HikaruさんはDメロの凛々しい歌に加えて、2番Bメロの〝守りたいと思うのは〟のブロックはまた違った温度感ですね。

Hikaru「そこは、守ってあげなきゃいけないな、という何かに対して持つ感情が表現されているので。熱さというより、温かみを出したいな、という気持ちもありました。ここで少し柔らかさを出しておくことで、次の強さも際立つな、と。だからクレッシェンドしていって、勢いも声量も上げていきました」

■そして、1番AメロのKeikoさんを支えるコーラスも聴きどころです。

Hikaru「ここまでKeikoさんのヴォーカルにベタづきでハモをするシングル曲はなかったですしね。ただ私の場合、支えるというより一緒にいるというか……太刀の隣りの〝脇差〟。〝堀川国広〟みたいな感じですね(笑)。Keikoさんの隣りに控えております、というイメージ」

Keiko「心強い(笑)」

Wakana「その関係でいくと、1番Aメロの私はフタ? あれ?……鞘です、鞘!(笑)この歌い出しって大好きなところで。その中で私は、一緒にいるようでいて、寄り添い過ぎているわけではない、というのが面白いんです。で、光で包む感じ。キラキラさせたかったんです」

■1番AメロのWakanaさんのコーラスアプローチも新鮮に感じましたよ。

Wakana「技術的には息が多めってことなんですけど、それよりも気持ち的な部分で。私がここで表現する存在は人間ではない何か、でありたかったんです。いろんな出来事がある中、それでも前に進む主人公に、人間ではない何かがそっと大丈夫、って耳元でささやいている感じ。そんな気持ちをキラキラと伝えるというコーラスをイメージしていて。だから実体感をあまり出したくなかったんです」

■サビの歌も格好いいです。Dメロの最後でWakanaさんが歌う〝砕けた夢の後〟という高音の歌も強いアプローチではなくて。

Wakana「サビでは世界が速く動いている中で自分だけゆっくりと振りかざすイメージでいたから、重たく歌いたかったんです。Dメロに関しては〝夢の後〟という、すべてが終わった後という悲しい叫びをイメージして。そしてこのフレーズの切り際は、2Aから入ってくるKeikoの歌への繋ぎも考えました。被せるわけでもなく、早めに切るのでもなく。それこそ刀をシュッと鞘に収めるような繋ぎでありたかったんです」

Keiko「全体的にWakanaちゃんは、『Kalafina with Strings』スタイルのアコースティックコンサートが活きているね。ハイハモもあのコンサートで、強くもなく弱くもなくっていうところの中間を詰めていった結果なのかなって(微笑)」

Wakana「そうなの!」

■という「百火撩乱」のカップリングには2曲用意されていて。まず「カンタンカタン」は、擬音語を含む不思議なタイトルの1曲。

Keiko「タイトルの響きが可愛い(笑)」

Wakana「静かでゆったりとして、言葉数も多い楽曲ですね。景色がイメージできるというか。いろんなことが日々起きる中で、少し休んでみることも必要だよ、って言ってくれているし」

Keiko「梶浦さんが列車の旅を想像しながら作ったっておしゃっていたんです」

Wakana「だから景色をただ見ているだけでも自分の心が洗われて、明日頑張れるという活力もあって。少し悲しいメロディなんですけど、歌詞は温かい。私は出だしの〝晴れ渡る九月の眩しさ〟という景色を感じて、優しさより笑顔で明るい気持ちを歌に出したいと思ったんです」

■九月の景色の後に描かれるのは、ココロは空っぽ、という心情です。

Wakana「でも、曲の最後はとても綺麗な1日だった、と感じているから!(微笑) それに私は、ココロが空っぽであることって悪くないと思うんです。いいものをいっぱい詰められるし。重たいカラダを手放したい、ってこの主人公は思っているわけですしね」

Keiko「この曲は歌うのと、聴くのとではあまりにも違って。聴いていると、リラックスできる楽曲。電車に揺られている心地良さの中、何もしなくても運んでいってくれて、景色がどんどん変わっていく。そんなリラックス感が、テンポとかコードにあって。例えばサビに行く直前の、〝向こう〟とか〝行くよ〟という私とWakanaの4度のハモリが絶妙だったり。でも、いざ歌うとなるとリラックスしてレガート感で歌ったら駄目で(笑)。リラックスして曲を楽しんでもらうためには、滑舌だったり、サウンドのグルーヴに当てていくポイントだっ


Wakana


Keiko

たりを注意して。特に私が担当する下のハモは、ブレずに。ずっとシェイカーを振っている感覚で歌っていく。掴んだら早いんだけど、それまでキチンと積んでいきたいと思わされた、難易度の高い、すごく好きな曲です」

■ゆったり走る列車のリズム感のようなものが曲に漂っているから、リズムに対する角度は大事なんですね。そして〝重たく抱え込む〟から始まる2番AメロはKeikoさんがメインヴォーカルですが、表情が変わります。

Keiko「ここは梶浦さんとどっちの方向で攻めるか本当に悩みました。〝やさしいうたや〝春を待つ〟のようにソフトな感じで言葉を乗せて、リラックス効果を高める歌い方をするのか。歌詞で抱えているものを今日は置いてきたとハッキリ言ってるからその心情をダイレクトに抑揚を付けて歌うのか。これは好みだね、って言いながら時間をかけて。ここまで2人で考え抜いてレコーディングしたのは、100曲を超えて初です」

Hikaru「2番Aメロの〝燦々と〟の歌い方がすごく好き！」

Wakana「うん、このメロディラインいいよね！」

Keiko「そこ悩んだ！　で、今のベストな形になったし、忘れられない曲になりました」

■ここはリバーブをかけていたり、そういった部分も細かく詰められてますね。Hikaruさんはどういう曲だと感じましたか？

Hikaru「気怠げな感じの曲だな、というのが私の感想なんです。私のオフの日はほとんどこういう気怠さで。家で、何もせず、とりあえずリセットする時間みたいな。そういう自分を1回別の場所に置こうという感じを歌の中に入れたら、予想以上に私のパートが（テンポに対して）後ろにいっていて。OKを出して下さったから、それで良かったんだ、と（笑）」

■Wakanaさんは笑顔で明るく、Hikaruさんはオフの時間……。メロディに漂うもの悲しさに反して、休暇の時間を感じさせられるのは、そういうところからでしょうか。でもこの曲、落ち込んだ時に聞いたらどう感じるんでしょうね。

Hikaru「寄り添ってくれると思います。その時その時の聴く人の気持ちに」

Keiko「ねっ、優しい曲だよね」

■確かに、優しい音楽。歌詞に擬音語が出てくるけれど、そこにどんな感情が乗るかも聴き手の感情次第だったりするんでしょうね。

Hikaru「〝カタンカタン〟とか〝カラカラ〟とかね。擬音語では〝ふわふわ〟のところのハモを歌う時、とてもふわふわさせていて、ほとんど息でした（笑）。主旋律のWakanaさんがちゃんと〝ふわふわ〟と歌ってくれてたから、私はふわふわ感を増幅できればいい、と思って」

■そのおかげで風にゆられて漂っているような感じが出ています！

Wakana「そう言えば私、最後だけ悲しく歌ったんです。〝とても綺麗ないちにちだったね〟という希望が溢れている言葉だし。とても静かに終わるので、寂しく」

Keiko「私、最後悲しくなったもん」

Wakana「ギャップなんですよね。歌詞が悲しければ明るく歌いたいし、とても明るければ寂しく歌ってみたいっていう。それがハマった曲でした」

■そして3曲目が「とんぼ」。シンプルでス



ローな1曲で……悲しくなりました。

Keiko「〝百火撩乱〟も悲しさを纏っているから」

Hikaru「図らずも、悲しい時に聴くと寄り添ってくれる曲が集まったシングルになってますね」

Wakana「そうだね。私はまず、メロディの雰囲気でイメージを受け取るんですけど〝とんぼ〟は、静かで、それぞれの息づかいが感じられる曲だな、と思ったんですね。その時のイメージは寂しさというよりゆったりソファーの中に沈んでいくような感じ。その後、歌詞を見て本当に悲しくなりました。で、レコーディングはピアノの櫻田（泰啓）さんと私たちの4人で同時に〝せーの〟でさせてもらったんです。その時、櫻田さんのピアノの指が語っているようなあの音にグッときて。一人ひとりの歌い出しでの、ためらい感だったり潔さだったりが感じられて。張り詰めた空気の中、みんなでメロディを繋いでいくっていう。それが本当にいいなと思える、楽しいレコーディングだったんです」

■そういう音の会話によるレコーディング。だから1番のサビが終わって、次の歌い出しなんて休符の長さも表現というか。

Hikaru「あそこは好きなタイミングで入っていいよ、って梶浦さんがおっしゃって。録った時の自分の気持ちの長さです」

Keiko「自分たちの活動の歩みをレコーディングをしていて感じましたね。一発録りの張り詰めた緊張感の中で、どこまで曲の世界に入り込めるかが大切なんですよ。入り込めなくなるといろんなことを考えてしまうし、言葉や歌唱に迷いがダイレクトに出て、それが連鎖もするんですね。少し固いな、と誰かが感じて歌っていたら、それが伝わっていく。そういうシンプルな曲の難しさをもう1回思い出しました。〝とんぼ〟という楽曲に対しては、8月のリリースということで季節を感じられるワードを入れてくださっていて。その中での主人公2人の世界。それは小さな世界なんだけど、とても大切で守りたいんだろうな、っていう。そんな想いを丁寧に歌いたかったんですね。だから、小さな世界をどれくらい豊かに響かせられるかに集中しました。言葉選びもわかりやすいですし、その人の感情を繊細に綴っている歌詞ですよね」

Hikaru「8mmとか16mmとか、フィルムの無声映画のような。カタカタカタカタって映写機が鳴っていて、映し出されるノイズの入った画面には2人がいて。そういうイメージを抱いたんです。この2人の気持ちを歌うというより情景を歌う。こういうことが起きている、っていう〝語り〟のような歌を思っていました」

■で、この2人って……。

Wakana「最後に、塞ぎ込むことにするんです」

■寂しさに追いつかれないなら、その閉じた世界も2人には優しいのかもしれないですね。

Keiko「そうなんですよね、いろんな世界があるんだな、と」

Wakana「3曲並べると、よりいろんな世界があると思うよね」

Hikaru「質の違う悲しみがある3曲。そして、時々の気持ちに寄り添ってくれる曲が詰まったシングルになりました」 B


初回生産盤A


初回生産限定盤B


通常盤


期間生産限定盤


完全生産限定アナログ盤

New Single
百火撩乱
初回生産盤A CD+DVD ¥1,389(tax out)
初回生産限定盤B CD+BD ¥1,575(tax out)
通常盤 CD ¥1,204(tax out)
期間生産限定盤(アニメ盤) CD+DVD ¥1,575(tax out)
完全生産限定 アナログ盤 ¥1,389(tax out)

[CD]
01. 百火撩乱
02. カンタンカタン
03. とんぼ
04. 百火撩乱 -instrumental-
05. カンタンカタン -instrumental-
06. とんぼ -instrumental-(アナログ盤のみ)
07. 百火撩乱 -TV Size-(期間生産限定盤／アナログ盤のみ)

Kalafina ⇒
カラフィナ。Wakana、Keiko、Hikaru。梶浦由記プロデュースによる、劇場版『空の境界』主題歌プロジェクトとしてスタートしたヴォーカル・グループ。'08年、シングル「oblivious」でデビュー。'17年9月と10月に世界遺産である、日光東照宮の陽明門竣工、興福寺の中金堂再建を記念しての御奉納公演が決定した。